

# 琉球大学学術リポジトリ

『趣味』と沖縄の投稿者たち：  
沖縄近代文学資料発掘 7

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/2286">http://hdl.handle.net/20.500.12000/2286</a>

## 『趣味』と沖繩の投稿者たち

沖繩近代文学資料発掘 7

仲 程 昌 徳

(1)

明治四十三年七月一日発行『趣味』第五卷第七号に、島地如文は「琉球の文芸——琉球節と三絃」と題したエッセーを発表している。島地は、それを「琉球は古来芸術の国である」と書き始め、古謡、劇、物語の紹介から言語、「蛇味線」の譜まで触れているが、ここには、極めて注目すべき指摘があった。

惣慶親雲上忠義等と共に古く有名な恩納ナベの歌ふた「笠に音ないらぬ、ふゆる春雨や、野山たちかくす、かすみとめて」などはよく琉球の春をうつしてゐるが琉歌には之等の地方的特色を帯びたものと日本思想の影響を受けたものとの二つの系統がある、遊女ヨシヤは後者に属する歌人で、其の「及はらんとめは、思ひますかゝみ、かけやちやうもうち、拌みほしやの」の思ひます鏡などは儘に日本特殊の掛言葉である、降つて近年の琉歌は重に此種のものであつた、然るに明治四十二年は復興の第一年ともいふべきで、三四月頃三十六島の詩人が那覇に会合し、四百年來沈衰の裡にある琉歌大会を開いて以来、再び天真流露の琉球を窺ひ得ることとなつた、その一面、劇に於ても骨ばかりとは云ひながら、ハムレットやホトゝギスが演じられて歓迎されつゝあるのも当に感情生活に復らんとする思潮の過度期と云へば言ひ得る。

島地は、そのように琉歌に「二つの系統」があること、それが長い間の沈滞を破って甦ってきたこと、更には古いものの復興だけでなく、外国劇の翻案や日本で流行っている劇を同時に舞台に乗せるといような新しい動きをも視野にいれて、「明治四十二年は復興の第一年ともいふべき」年だと指摘していた。

明治四十二年は沖繩の文芸復興の第一年だと喝破したのは、伊波月城であった。そのことからして、島地は月城のペンネームかとも思われるが、この指摘は、単に琉歌の復活、或いは翻案劇の登場ということだけにとどまらず、中央で刊行されていた諸雑誌への、投稿という形にも現れていた。

島地のエッセーが掲載された『趣味』も同じで、明治四十二年から四十三年にかけて、沖繩からの投稿が「趣味俳壇」や「趣味歌壇」を賑わせている。

〈四十二年五月一日・第四卷第五号〉

麦門冬

春を惜む柱に屋根の重かつし

〈四十二年十月十日・第四卷第十号〉

末吉落紅

憎まれて世に生くるほど快きものはあらじと心ひがみぬ

つれなしとわれを泣くなるわが妻の涙をだにも羨ましけれ

悔ゆとして思ひかへせどあながちに人の悪むに横道に入れ

髯長くかい垂れし人長者ぶりわれに教ふること多からめ

第四卷第五号の麦門冬は、末吉麦門冬と断定することは出来ないが、第四卷第十号に落紅の短歌が見られること

からすると、末吉であったと見ていいかと思う。末吉安恭は短歌作者として落紅、俳句作者としては麦門冬をというように使い分けている。

『趣味』が創刊されたのが、明治三十九年六月。麦門冬の登場が四十二年の五月であることからして、沖繩の投稿者たちの同雑誌への登場は、わりと遅かったと言える。

〈四十二年十月一日・第四卷第十号〉

摩文仁賢輔

われはしも罪知りそめぬおちつきのみき眼もて人を見るてふ

くらやみもはた日のでらすあかるさも眼をしとづれば何事もなし

〈四十二年十二月一日・第四卷第十二号〉

半酔

鯨突く首途や人の眉たかし

麦門冬

素車白馬肅々として露の中

「趣味俳壇」は、出身県名を作者の肩につけてない。そのことで、麦門冬というのが他にもいる場合その見分けが困難になるということもある。半酔の場合も明確に言うことはできないが、沖繩の俳句結社の一つである「ガジマル会」で活躍した一人に同名のものがあることからして、沖繩からの投稿者と見てまず間違いないのではなからうか。麦門冬は、他の俳句結社「カラス会」で活躍している。

半酔と麦門冬は、それぞれその拠った結社は異なるが、俳句仲間としての交流はあったであろうし、多分麦門冬

に刺激されて半酔も「趣味俳壇」に投稿したのではなからうか。

（四十二年十二月一日・第四卷第十二号）

摩文仁松庵

われ七つ養秀院にまなびたる童兒昔談よめばわびしも

うつしゑにのこる父母少しだに子を思ふなどのたまひてみよ

みなしこわれ玉を失ひぬ失ひて父のことなど思ひつゞけぬ

虎頭山山の端（ヒマツ）はなる月の色いつよりもよし闇ひらけゆく

悲しみぬわが真をみず半面のおもしろからぬわれみる人を

初冬の十方暮の口のつづく朝なり二日酔の唄声

わが家は芭蕉のかげにうづくまる飯匙蛇に似るなど書き送らまし

酒たうべ酔えるあひだはもて来にし愁ひもはたや君も思はず

この頃は君思ふより泡盛のするとき香もて舌やくがよさ

摩文仁松庵は、第四卷第十号に出てきた摩文仁賢輔であろうか。それとも後に出てくる摩文仁朝信であろうか。朝信が、実に多くのペンネームをもっていたことからすると、朝信のようでもあるが明らかではない。

(2)

明治四十二年の「趣味俳壇」や「趣味歌壇」に登場した顔ぶれは、他の雑誌と比べるとそれほど多いとはいえない。四十三年も同様である。

〈四十三年一月一日・第五卷第一号〉

末吉落紅

人悪くなりたる人とけふもまた渋き顔してむかひあふべく

おぞましく賭けたる頸はやうやうに斬るべきすぢとなりけるかな

〈四十三年二月一日・第五卷第二号〉

末吉落紅

豆ランプあるかなきかのうす明り物ぬふ妻のあるがわびしき

叔父上はおのが若さに見たまひし女の名をばたゝへますかな

〈四十三年三月一日・第五卷第三号〉

摩文仁月来

その父は聾をば残しその母は人墨したる愚ものでふ

蛇皮線をかきならしつゝ陶然とゑひし心地に唄ひてわする

夕風にふかるる棕櫚の葉の音と山羊の泣く音と聞きのよろしき

涙もて面あらひしそのかみの小き心にかへる悲しさ

野のはての大海原に日は出でぬいかに少女よかゝるあけぼの

神さへもさばきあたはぬ悲みの分け前もてる男産まざれ

一葉ちり五六ちりしく雨の日の林のごとき心となりぬ

〈四十三年四月一日・第五卷第四号〉

末古落紅

たちちねにしたがひすぎて何事もなしえぬ者と人やいふらん

〈四十二年四月一日・第五卷第四号〉

摩文仁朝信

図書館の青硝子ごし町の灯の群りたるを瞳をすゑて見る

恋すればかならずやぶれやぶるれば悔の言葉を云ふがかなしき

第五卷第三号に登場した摩文仁月来も、摩文仁松庵と同じく不明。摩文仁朝信が本名を使って登場するのはこの号から始まる。

〈四十三年四月一日・第五卷第四号〉

麦門冬

春の水子別れ馬の顔洗へ

うつろ木の朽葉だまりや蛙なく

〈四十三年五月一日・第五卷第五号〉

摩文仁朝信

泡盛のつばを抱きて七日ほどねむらずありぬかなしみのため

泡盛に洵然と酔ひ唄ふよりさとれるわざをわれは知らなく

君をしもきはめんとせずかの空に日の照ることをきはめぬごとく

聖人のふたぎたまひし路こえて酒のみにゆく正忠と吾

泡盛をたうべぬ時は木像のごとくさびしき正忠の顔

さびしさに古りて黄ばめる板壁を叩きて唄ふ春の夕ぐれ

あやにくや土色面の琉球の人の裔なりわが面もまた

アダン葉のかけにかくれてすゞしくも銀笛吹ける少年は誰ぞ

夕さればさまよひ来てはものおもふ琉球の墓の白きあたりに

#### 麦門冬

椿落ちてまた広がりし水輪かな

「趣味俳壇」「趣味歌壇」に見られる沖繩出身者の作品は、第五卷第五号までである。四十三年は落紅、月来、朝信、麦門冬と出てくるが、落紅と麦門冬は同一人で、ひよっとすると月来と朝信も同一人の可能性があることからすれば、わずか二人しか登場しなかったことになる。

そのように『趣味』に登場した沖繩出身の表現者は少なかった。また、彼らの作品にしても、彼らの作品のなかでとりわけ優れたものが、ここに発表されたということは出来ない。『趣味』は、そういう意味では、沖繩の表現者にとって、それほど注目された雑誌では無かったかも知れないが、最終巻号第五卷第七号に掲載された島地如文の「琉球は古来芸術の国である」という高らかな宣言によって書きだされた「琉球の文芸」一篇があることでも、忘れるわけにはいかない雑誌の一つであると言えよう。